

「学習成果を軸とした質保証システムの の在り方について」

～グローバル人材の育成を目指して～

ベネッセ教育研究開発センター

センター長 新井健一

2013.4.18

◆ベネッセ教育研究開発センターの活動

教育に関する調査、研究、開発

- 教育に関する実態調査
- 高等教育に関する調査、研究
- ICTなどの情報機器を利用した新しい学習方法に関する研究
- 英語の習得や英語教育の実態に関する調査、研究
- 能力・スキルの育成と測定に関する研究
- 産学連携、大学、研究機関との共同研究

調査、研究内容の情報発信

- ご家庭、研究者、教育委員会等行政、学校、幼稚園等への情報提供
情報誌（進研ゼミ、VIEW21、これからの幼児教育を考える）、メディア
- ホームページを通じた幅広い発信
ベネッセ教育研究開発センター サイト <http://benesse.jp/berd/>

1. 国際的アセスメントに見る これからの社会に必要な能力と測定

育成すべき能力と課題

OECD

PISA PIAAC AHELO …スキル戦略

ATC21s

Ways of thinking. Creativity, critical thinking, problem-solving, decision-making and learning

Ways of working. Communication and collaboration

Tools for working. Information and communications technology (ICT) and information literacy

Skills for living in the world. Citizenship, life and career, and personal and social responsibility

EU キーコンピテンシー

- 1 母語によるコミュニケーション力
- 2 外国語によるコミュニケーション力
- 3 数学的能力、科学・技術における基礎能力
- 4 ICTに関する能力
- 5 学び続ける力
- 6 社会人・市民としての能力
- 7 開拓的・起業家的精神
- 8 文化的意識・表現力

国際バカロレア (IB) の10の学習者像

Inquirers	探究する人
Knowledgeable	知識のある人
Thinkers	考える人
Communicators	コミュニケーションができる人
Principled	信念のある人
Open-minded	心を開く人
Caring	思いやりのある人
Risk-takers	挑戦する人
Balanced	バランスのとれた人
Reflective	振り返りができる人

CRET/BERD共催 国際シンポジウム

Benesse® 教育研究開発センター
Benesse Educational Research & Development Center

「これからの社会で求められる人材、能力とその力の測定とは」

アンドレアス・シュライヒャー氏

OECD教育局次長

「21世紀の学びと教育—世界の教訓」

エックハルト・クリーメ氏

ドイツ国際教育研究所 教育の質・評価センター長

「国際的大規模事例におけるコンテキスト・アセスメント」

ジャンポール・レーフ氏

ドイツ国際教育研究所上級コンサルタント

「各国の文脈における国際的大規模アセスメント」

深堀聡子氏

国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官

「なぜジェネリックスキルを測定するのか」

三宅なほみ氏

東京大学大学院教育学研究科教授

「協調、ICT,そして評価」

サミュエル・グライフ氏

ルクセンブルク大学教授

塩見みづ枝氏

文部科学省初等中等教育局教育課程課 課長



<http://www.cret.or.jp/>

<http://benesse.jp/berd/>

パネルディスカッションより

- 協調的問題解決は真の21世紀スキルとされ、すべての科目で必要とされている。この評価が可能になったのは、長年の認知科学の研究成果、複雑な処理を可能にするコンピュータ技術の進展、OECDの革新への強い意欲があったから。21世紀型スキルは重要であり、測定可能だが忍耐と時間が必要。
- 21世紀型スキルはどのようなスキルで、どのように測り、育成していけばよいかほとんど分かっていない。
- PISA2015の協調的問題解決は、アニメーションで作成されたエージェントと協調して解決する方法。開発は難しい。
- 評価を導入する時、結果から何が学べるかをステークホルダーに説明すべき。政策立案者にも結果の活用の仕方をうまく説明する必要がある。
- 教育課程の中でどのように展開し、どのように評価すべきか、入試のありかたをどのように見直すかなどの検討が必要。
- 育成の点では、問題解決や協調、創造性という科目はないので、どのように学校や仕事と結び付けて促進していくかが課題。
- 学校や教師が自信を持って教育の改善に取り組めるようにすることが、アセスメントの役割。
- チームワークが苦手な日本人。得意なのはグループワーク。
- ICTの活用により、学ぶことと評価の距離が近くなる。

2. 高校生、大学生の 学びへの意識と課題

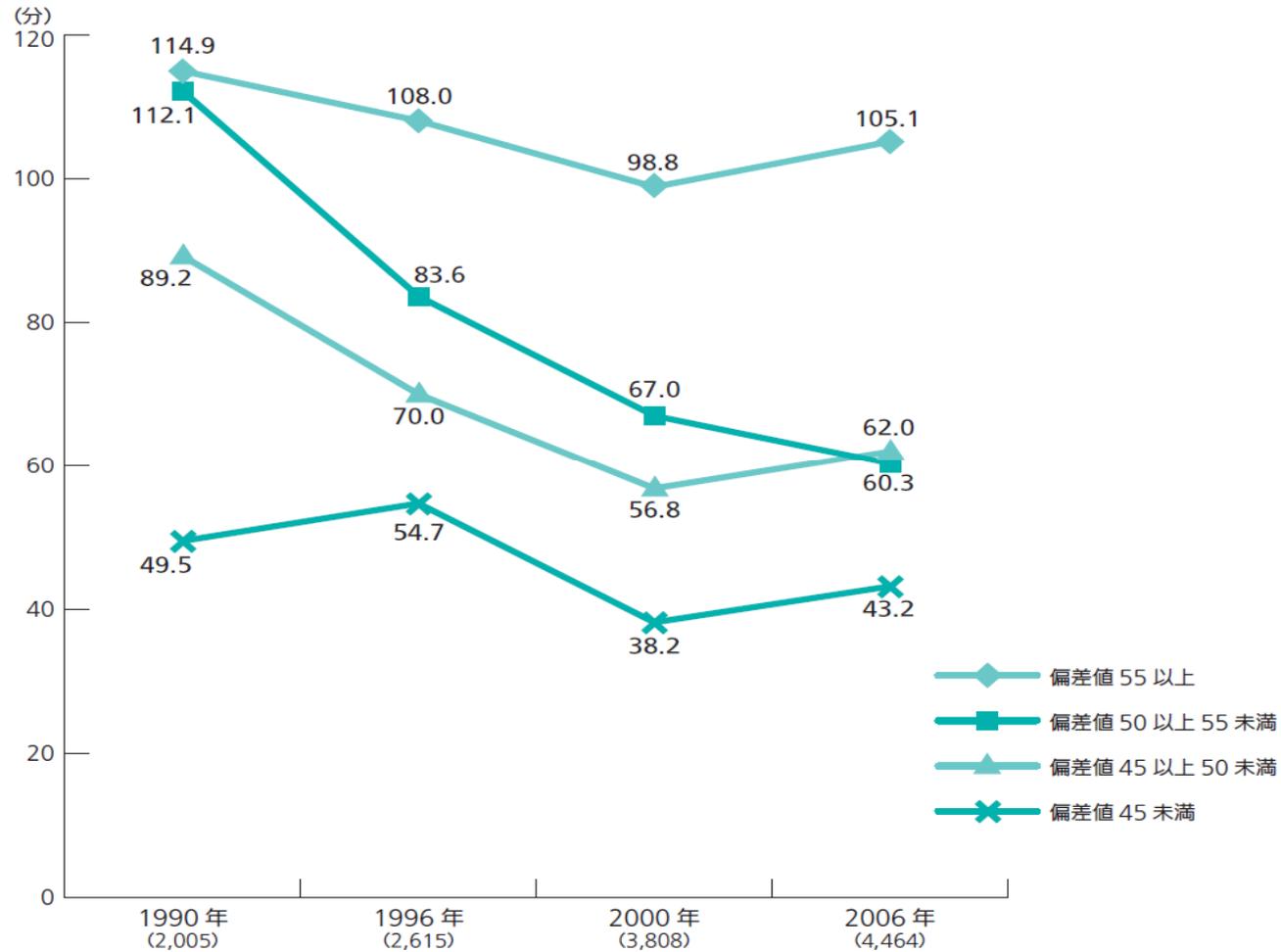
高校生の姿

あなたはふだん（月曜日～金曜日）、学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。



図1-1-1 平日の平均家庭学習時間（偏差値帯別）

高校2年生



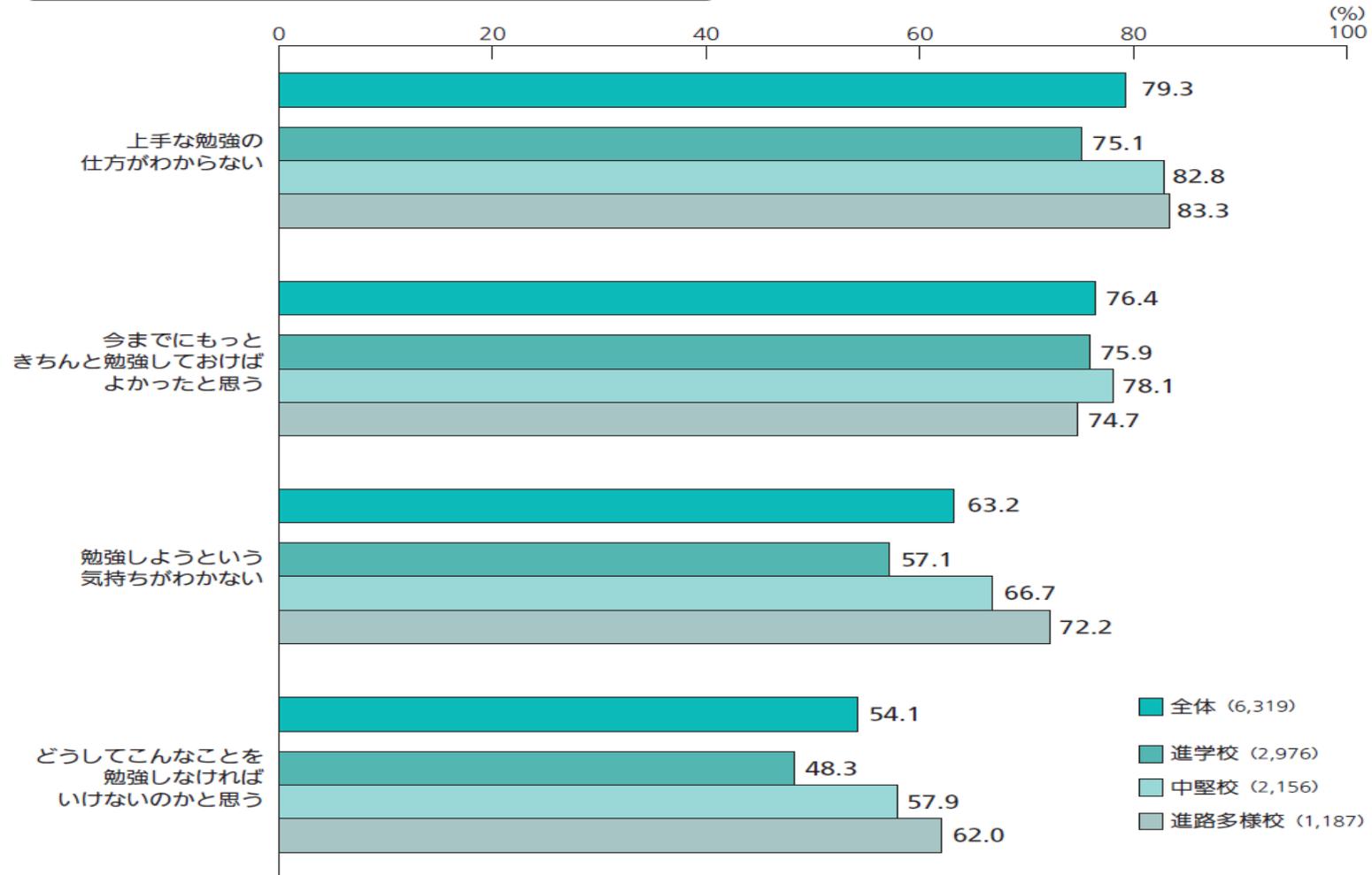
注1) 平均家庭学習時間は、「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分のように置き換えて算出した。
注2) 対象は高校2年生。()内はサンプル数。
「第4回 学習基本調査」(2006)

高校生の姿

Q あなたは勉強の取り組み方について、次のようなことがあてはまりますか。

図1-1-2 学習する上での課題(全体・偏差値層別)

高校1・2年生



注1) 「とてもそう」 + 「まあそう」の%。選択肢は「とてもそう」「まあそう」「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」の4段階。

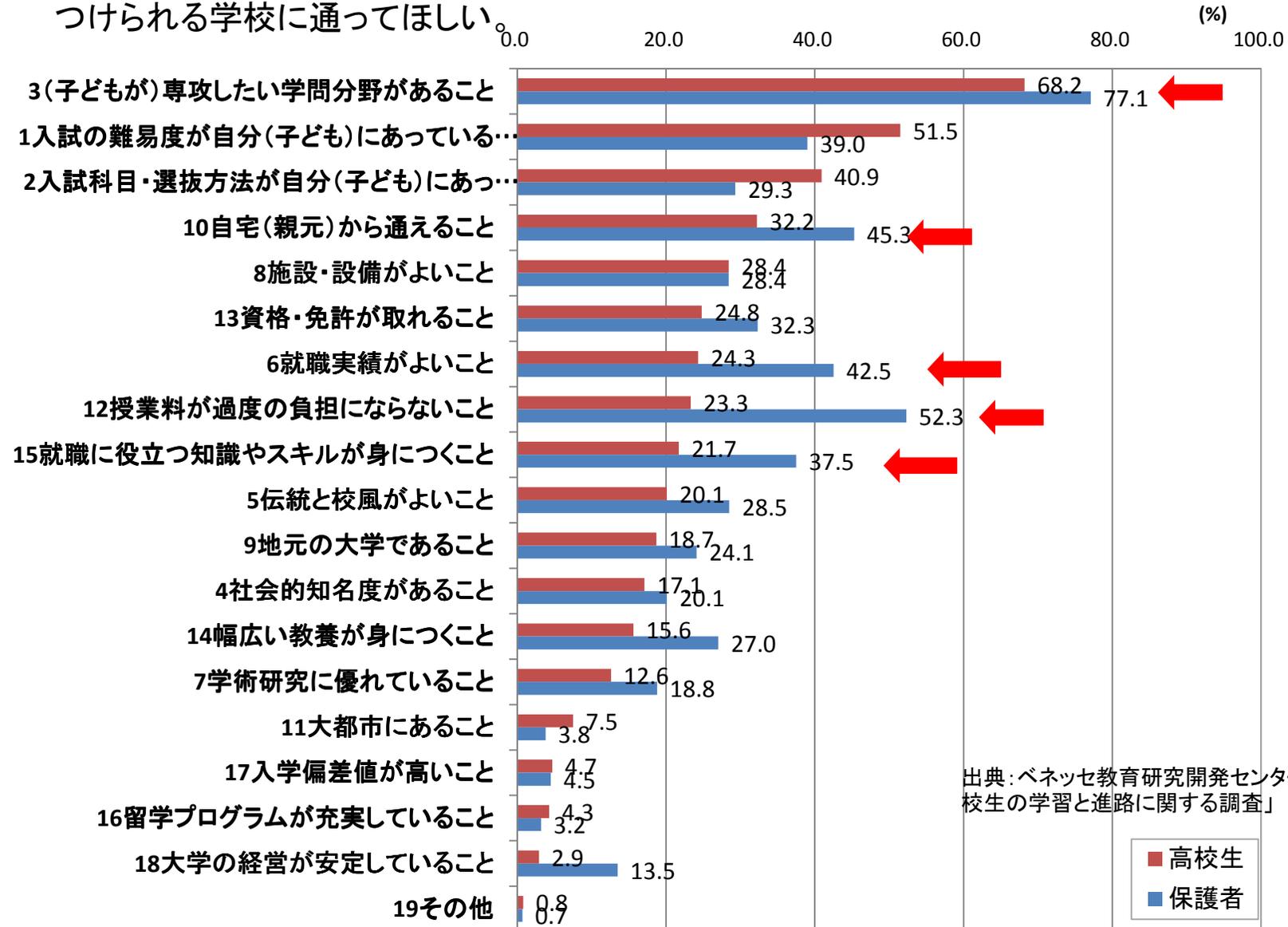
注2) 「進学校」は偏差値60以上目安、「中堅校」は偏差値50～59目安、「進路多様校」は偏差値50未満目安。

注3) 対象は高校1・2年生6,319人。()内はサンプル数。

「第2回 子ども生活実態基本調査」(2009)

大学選択の際に重視すること(保護者+高校生)

保護者の願い=こどもの好きな分野で、⇒ 経済的負担が軽く、⇒就職できる力を身につけられる学校に通ってほしい。



出典:ベネッセ教育研究開発センター「高校生の学習と進路に関する調査」

子どもの進学先を選ぶために必要な情報(その1)

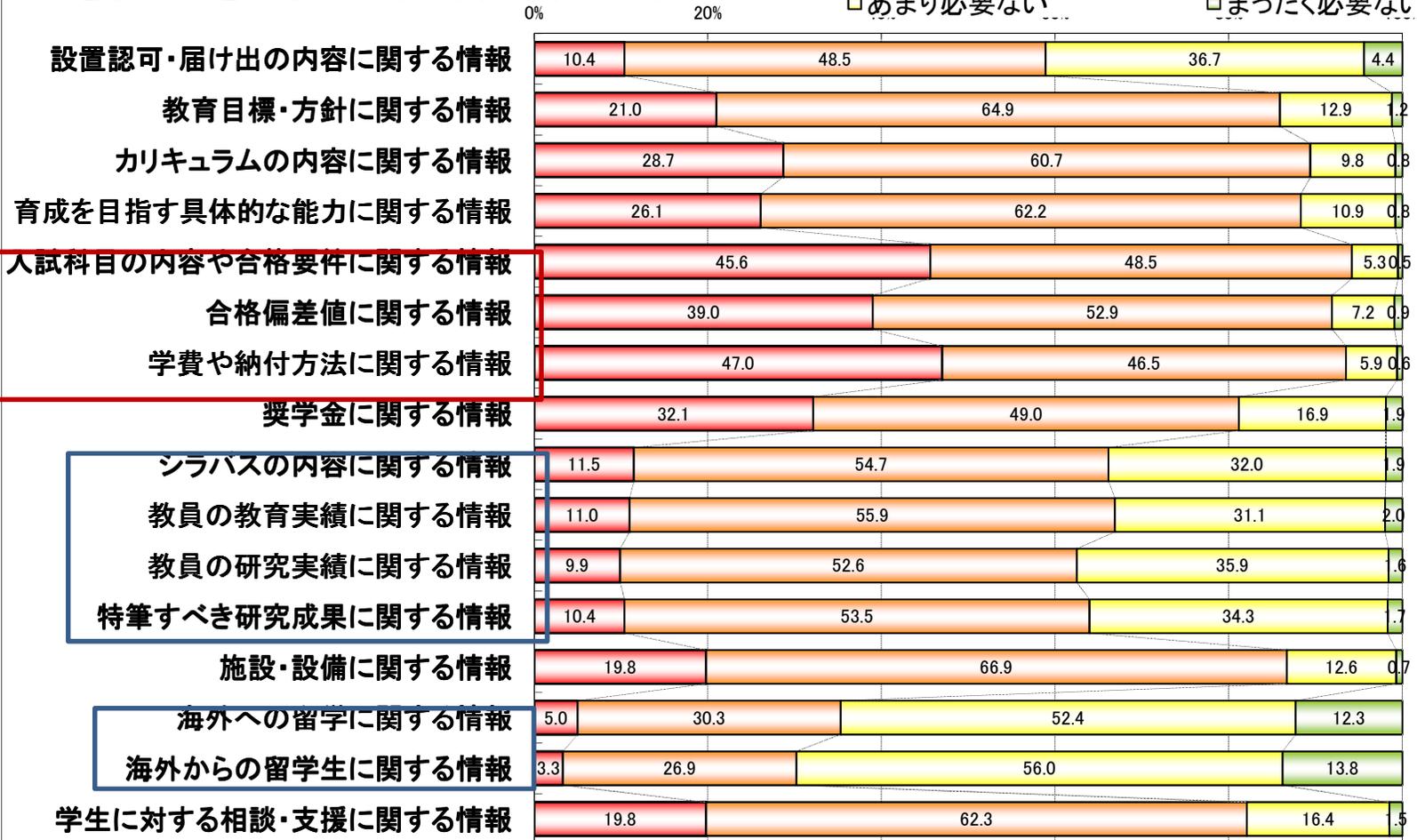
大学選びに際して大学の就職実績情報は、もはや入試に必要な偏差値や合格要件などの情報と、同じかそれ以上の重みを持っている。

[Q]お子さんが進学される「大学を適切に選ぶにあたって」、どのような情報

が必要だと思いますか。(それぞれ1つずつ)

大いに必要
あまり必要ない

まあ必要
まったく必要ない



出典：ベネッセ教育研究開発センター「高校生の学習と進路に関する調査」

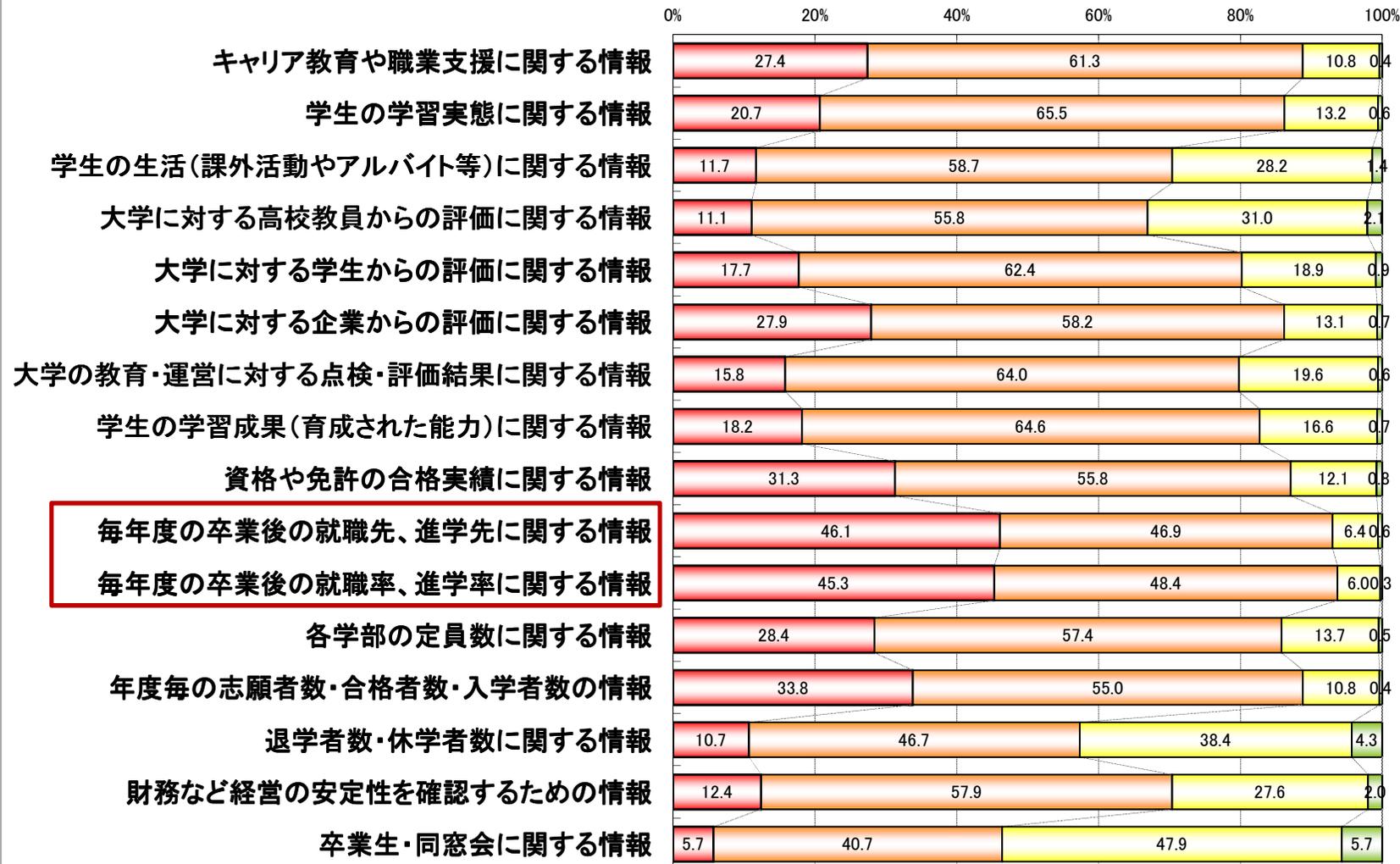
(C) Benesse Corporation 無断転載を禁じます

子どもの進学先を選ぶために必要な情報(その2)

[Q]お子さんが進学される「大学を適切に選ぶにあたって」、どのような情報

が必要だと思いますか。(それぞれ1つずつ)

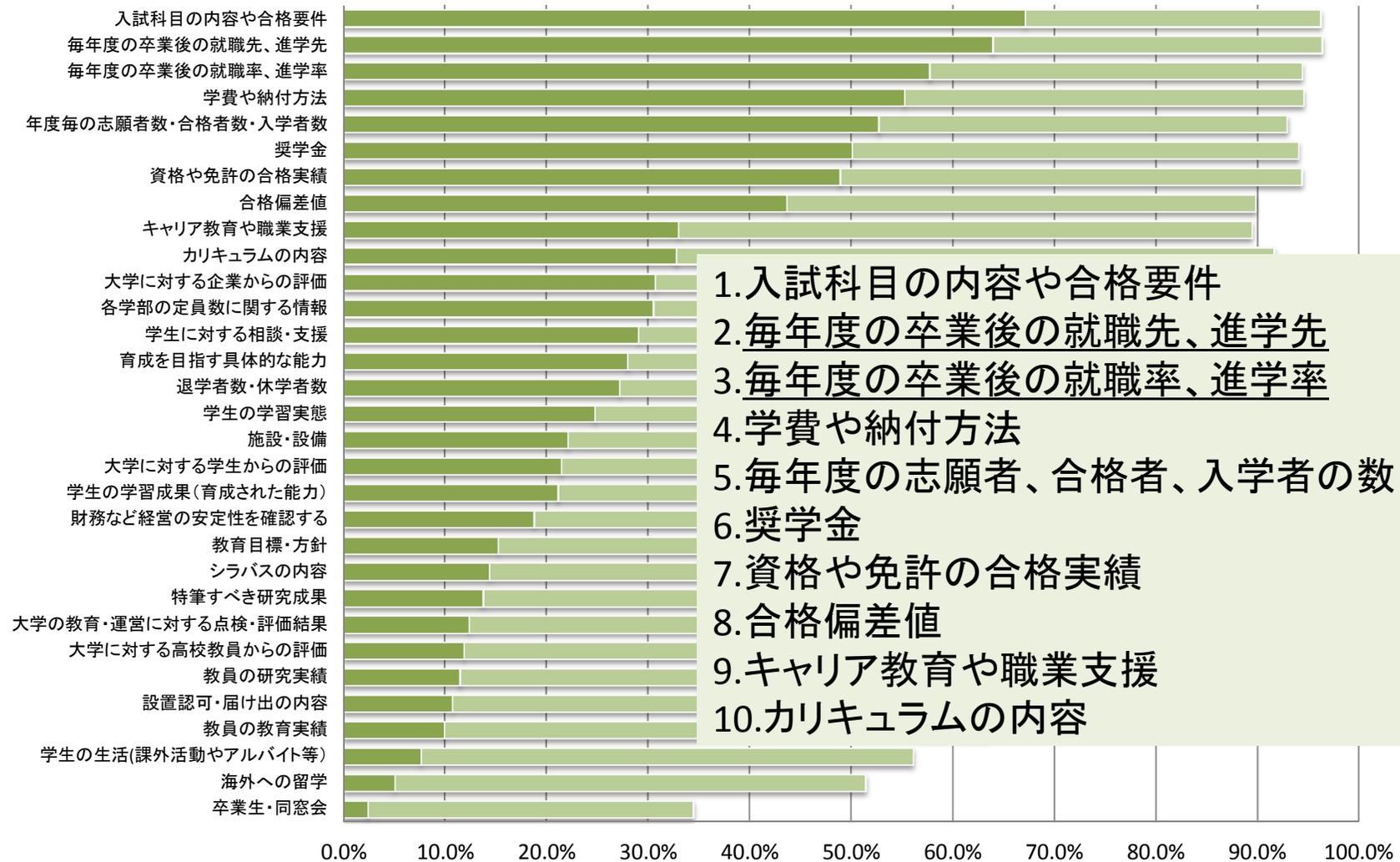
大いに必要 まあ必要 あまり必要ない まったく必要ない



進路指導において必要な情報

進路指導において必要な情報(全体「大いに必要」の高い順)

■ 大いに必要 ■ まあ必要



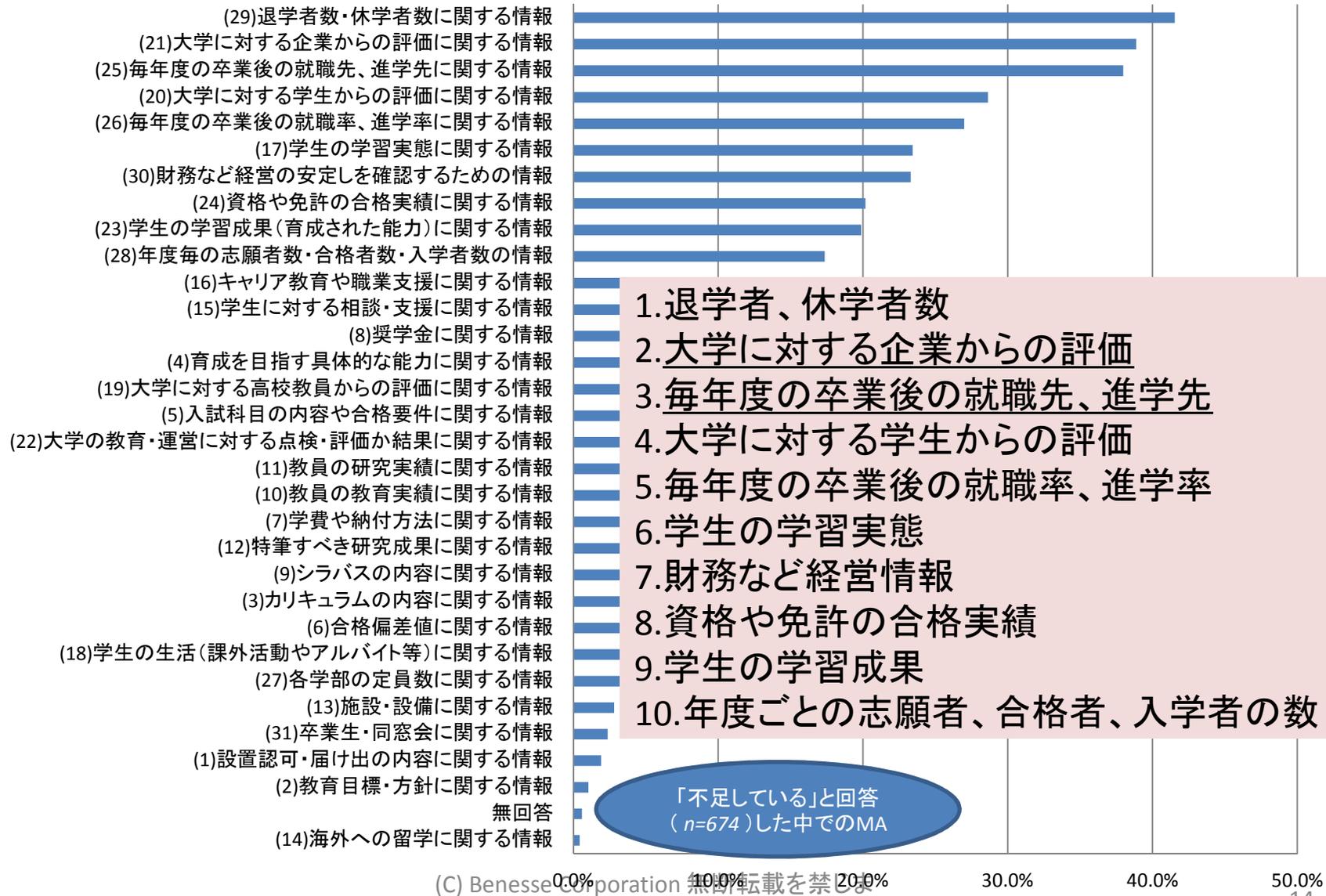
1. 入試科目の内容や合格要件
2. 毎年度の卒業後の就職先、進学先
3. 毎年度の卒業後の就職率、進学率
4. 学費や納付方法
5. 毎年度の志願者、合格者、入学者の数
6. 奨学金
7. 資格や免許の合格実績
8. 合格偏差値
9. キャリア教育や職業支援
10. カリキュラムの内容

出典: ベネッセ教育研究開発センター「高等学校からみた大学教育の課題に関する調査」

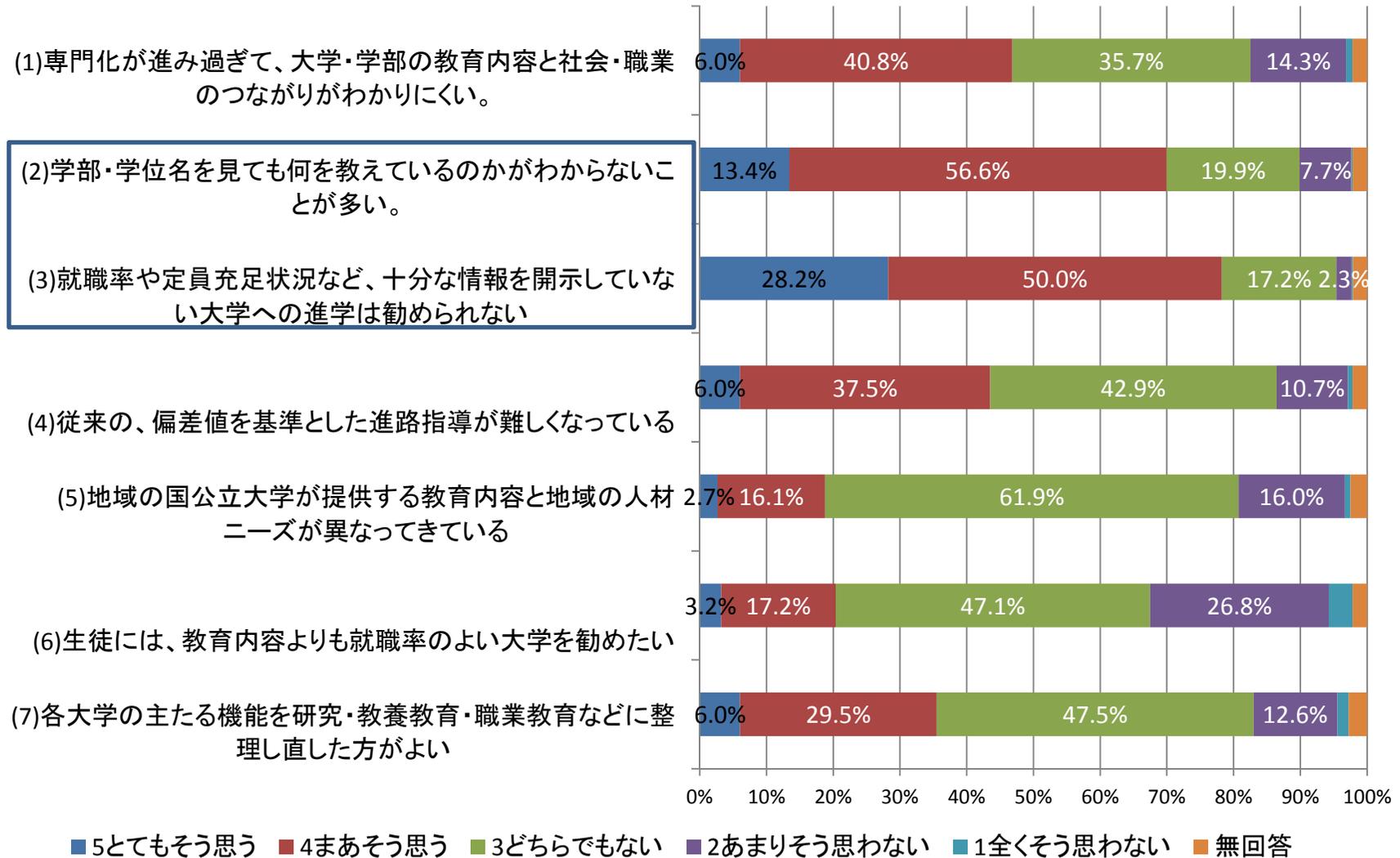
(C) Benesse Corporation 無断転載を禁じます

進路指導において「不足している」情報

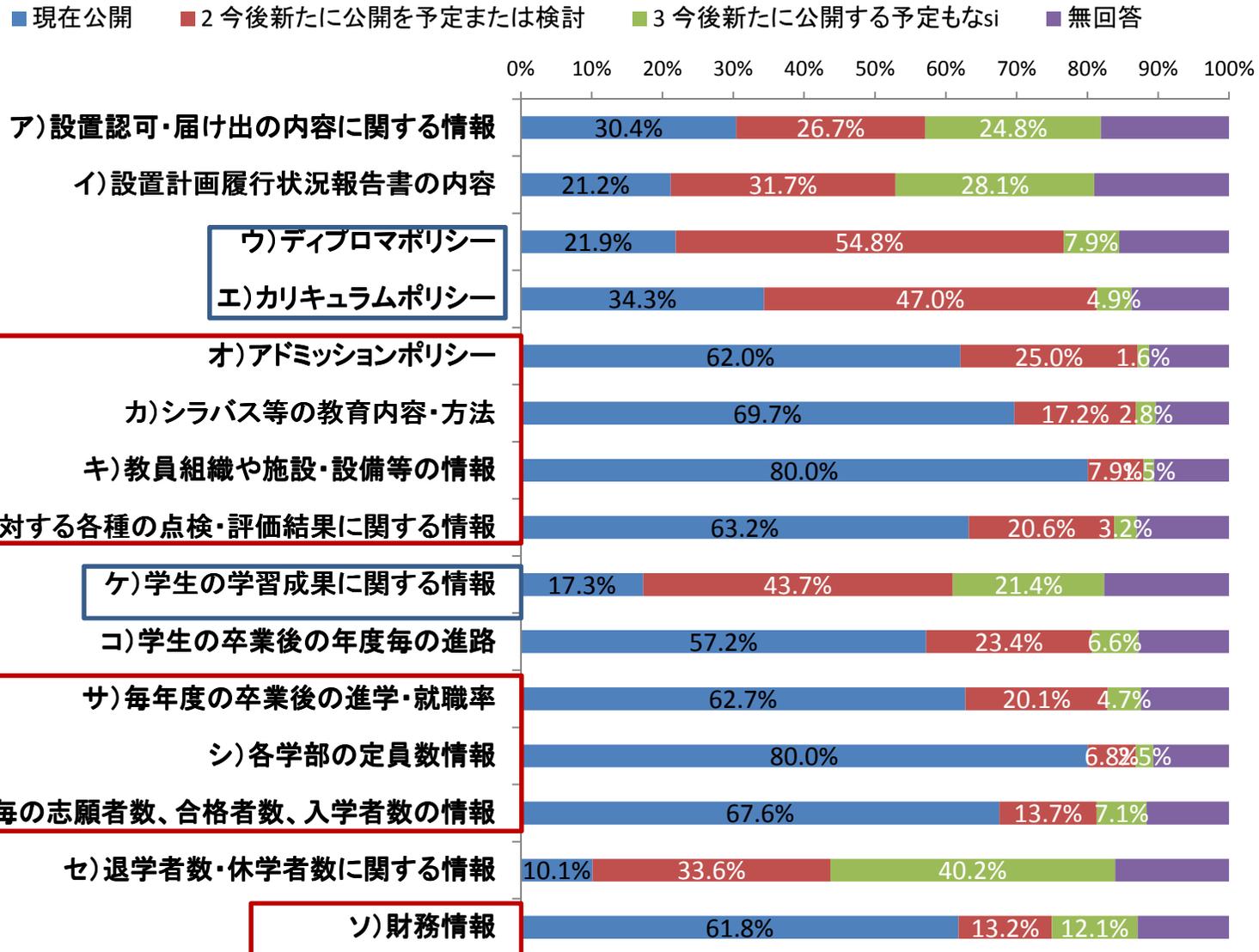
進路指導において不足している情報



進路指導担当先生の現在の大学進路指導への意識



大学は、今後どのような情報を公開しようと検討しているか



出典: ベネッセ教育研究開発センター「質保証を中心とした大学教育改革の現状と課題に関する調査」09年度

(C) Benesse Corporation 無断転載を禁じます

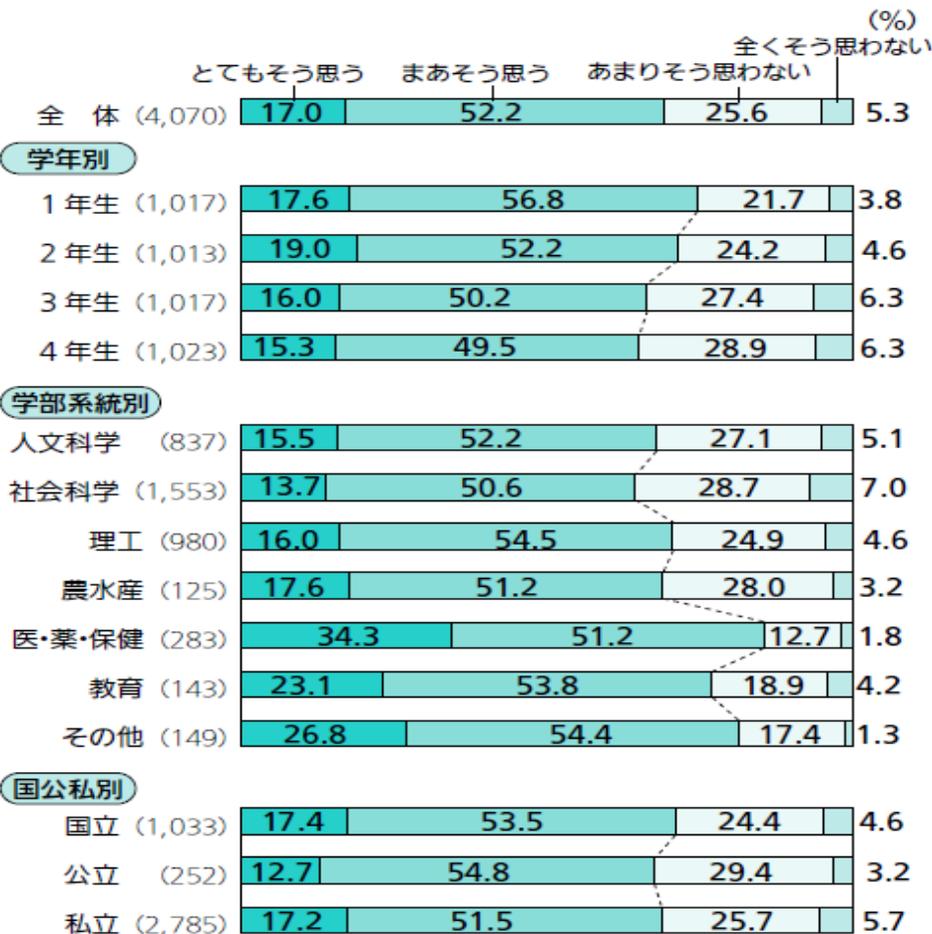
大学生の姿

Q あなたは、次のようなことからについてどう思いますか。

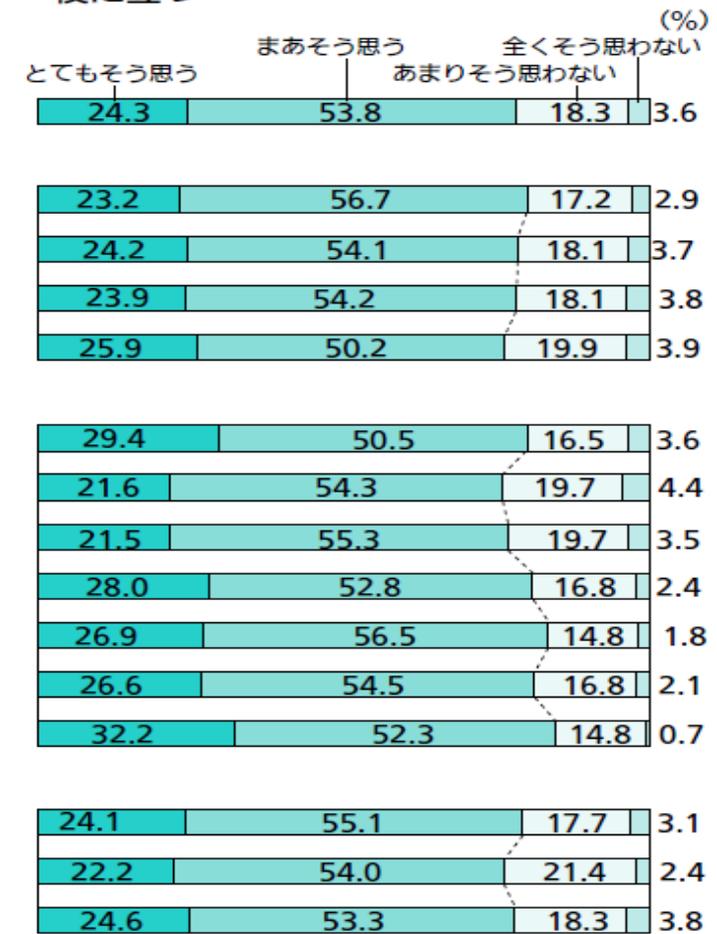
図2-2-1 大学での学びに対する意識

大学1～4年生

●大学の授業で学んだことは将来役に立つ



●授業に限らず大学で学んだことは、将来役に立つ



注) 対象は大学1～4年生4,070人。()内はサンプル数。
「大学生の学習・生活実態調査」(2008)

大学生の姿

Q 大学教育について、あなたは次にあげる A、B のどちらの考え方に近いですか。それぞれ近いものをお選びください。

図 2-2-2 大学教育に対する選好 (全体)

大学 1~4 年生

	A	Aに近い	Bに近い (%)	B
①	学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい	43.0	57.0	学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい
②	大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい	59.2	40.8	大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい
③	あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい	35.1	64.9	あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい
④	教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい	82.0	18.0	学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい
⑤	応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい	72.9	27.1	基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容が中心の授業がよい
⑥	出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい	70.0	30.0	定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい
⑦	あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい	48.9	51.1	単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい
⑧	大学での学習の方法は、大学の授業で指導を受けるのがよい	39.3	60.7	大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい
⑨	授業以外でも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい	72.5	27.5	授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい

注) 対象は大学 1~4 年生 4,070 人。
「大学生の学習・生活実態調査」(2008)

表3-1-3 大学教育に対する選好（全体・学年別）

（％）

	全体 (4,070)	1年生 (1,017)	2年生 (1,013)	3年生 (1,017)	4年生 (1,023)
⑦ A:あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい	48.9	48.5	50.5	50.3	46.4
B:単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい	51.1	51.5	49.5	49.7	53.6
⑥ A:出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい	70.0	74.9	70.2	68.9	66.0
B:定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい	30.0	25.1	29.8	31.1	34.0
⑤ A:応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい	72.9	74.2	75.0	70.6	71.6
B:基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容が中心の授業がよい	27.1	25.8	25.0	29.4	28.4
④ A:教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい	82.0	84.7	83.7	80.7	79.0
B:学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい	18.0	15.3	16.3	19.3	21.0
② A:大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい	59.2	56.1	60.8	58.1	61.8
B:大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	40.8	43.9	39.2	41.9	38.2
③ A:あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい	35.1	33.8	37.5	35.5	33.6
B:あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい	64.9	66.2	62.5	64.5	66.4
⑧ A:大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい	39.3	43.0	40.8	38.6	34.7
B:大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい	60.7	57.0	59.2	61.4	65.3
① A:学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい	43.0	46.5	42.1	43.6	39.8
B:学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい	57.0	53.5	57.9	56.4	60.2
⑨ A:授業以外でも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい	72.5	72.4	72.3	74.0	71.2
B:授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい	27.5	27.6	27.7	26.0	28.8
A:学生生活については、大学の教員が指導するほうがよい	15.3	15.5	15.3	14.7	15.7
B:学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい	84.7	84.5	84.7	85.3	84.3

注) ()内はサンプル数。

表3-1-4 大学教育に対する選好（全体・学部系統別）

（％）

	全体 (4,070)	人文科学 (837)	社会科学 (1,553)	理工 (980)	農水産 (125)	保健その他 (283)	教育 (143)
⑦ A:あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい	48.9	44.1	53.6	50.9	44.8	44.9	<u>37.8</u>
B:単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい	51.1	55.9	46.4	49.1	55.2	55.1	62.2
⑥ A:出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい	70.0	71.7	66.7	72.6	72.8	68.9	<u>75.5</u>
B:定期試験や論文・レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい	30.0	28.3	33.3	27.4	27.2	31.1	<u>24.5</u>
⑤ A:応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい	72.9	69.4	73.4	74.9	68.8	72.8	75.5
B:基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容が中心の授業がよい	27.1	30.6	26.6	25.1	31.2	27.2	24.5
④ A:教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい	82.0	81.6	82.8	82.4	82.4	83.7	<u>74.8</u>
B:学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい	18.0	18.4	17.2	17.6	17.6	16.3	<u>25.2</u>
② A:大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい	59.2	63.8	62.1	54.3	<u>51.2</u>	<u>50.5</u>	62.2
B:大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい	40.8	36.2	37.9	45.7	<u>48.8</u>	<u>49.5</u>	37.8
③ A:あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい	35.1	<u>23.7</u>	31.6	<u>43.1</u>	37.6	<u>58.7</u>	32.2
B:あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい	64.9	<u>76.3</u>	68.4	<u>56.9</u>	62.4	<u>41.3</u>	67.8
⑧ A:大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい	39.3	35.1	39.3	43.4	36.8	40.6	<u>32.2</u>
B:大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい	60.7	64.9	60.7	56.6	63.2	59.4	<u>67.8</u>
① A:学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい	43.0	<u>33.8</u>	43.9	43.1	39.2	<u>65.7</u>	<u>49.0</u>
B:学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい	57.0	<u>66.2</u>	56.1	56.9	60.8	<u>34.3</u>	<u>51.0</u>
⑨ A:授業以外にも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい	72.5	73.7	70.1	73.9	74.4	72.1	75.5
B:授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい	27.5	26.3	29.9	26.1	25.6	27.9	24.5
A:学生生活については、大学の教員が指導するほうがよい	15.3	13.1	16.8	16.8	12.8	13.8	11.9
B:学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい	84.7	86.9	83.2	83.2	87.2	86.2	88.1

注1) 学部系統別の「その他」は省略した。

注2) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注3) 〃は全体よりも5ポイント以上、〃は10ポイント以上低いものを示す。

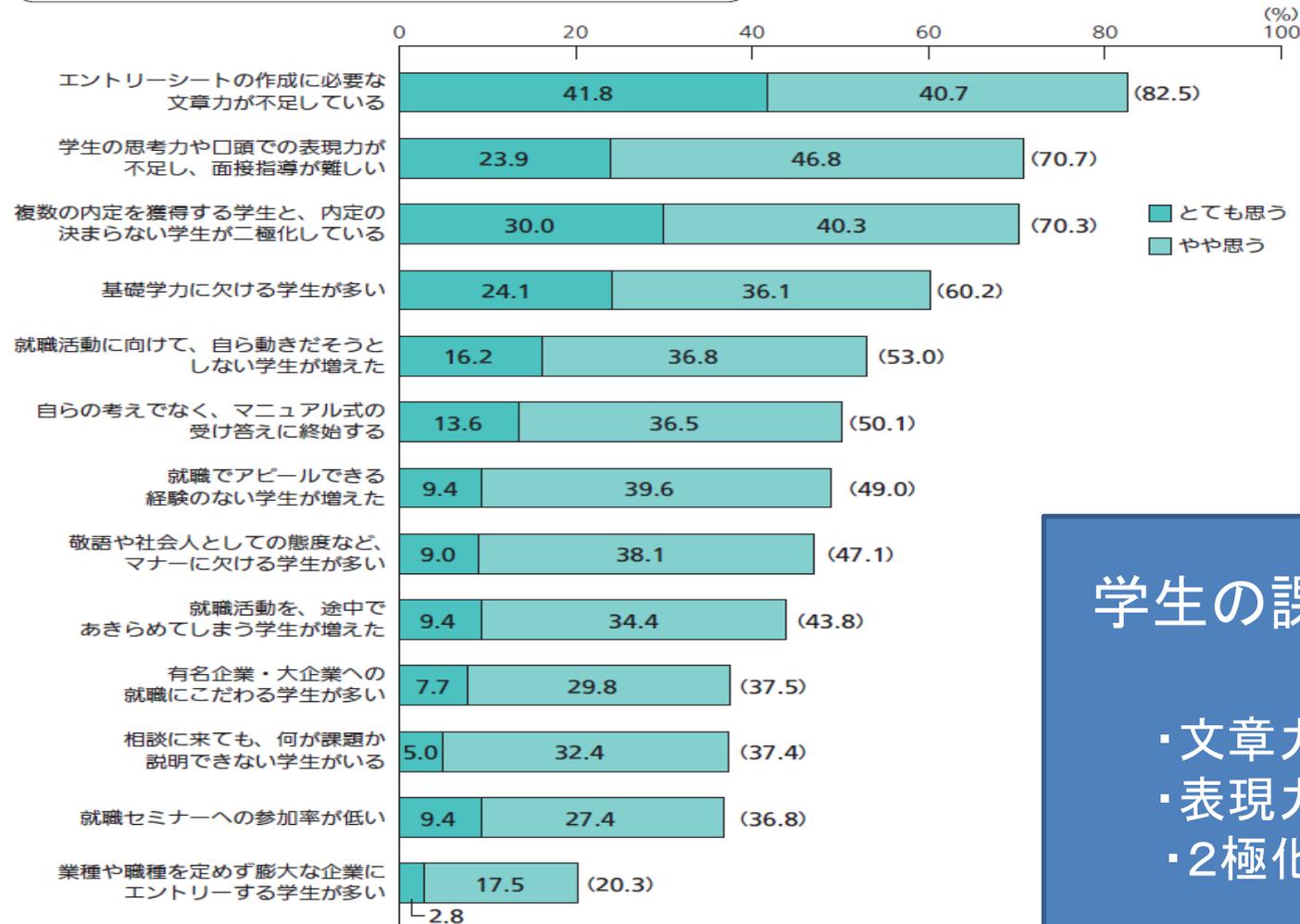
注4) ()内はサンプル数。

社会との接続

Q 貴大学の就職支援活動において、学生側にみられる問題点・課題は何ですか。

図4-3-3 就職支援活動における学生の問題点・課題

キャリアセンター長



学生の課題

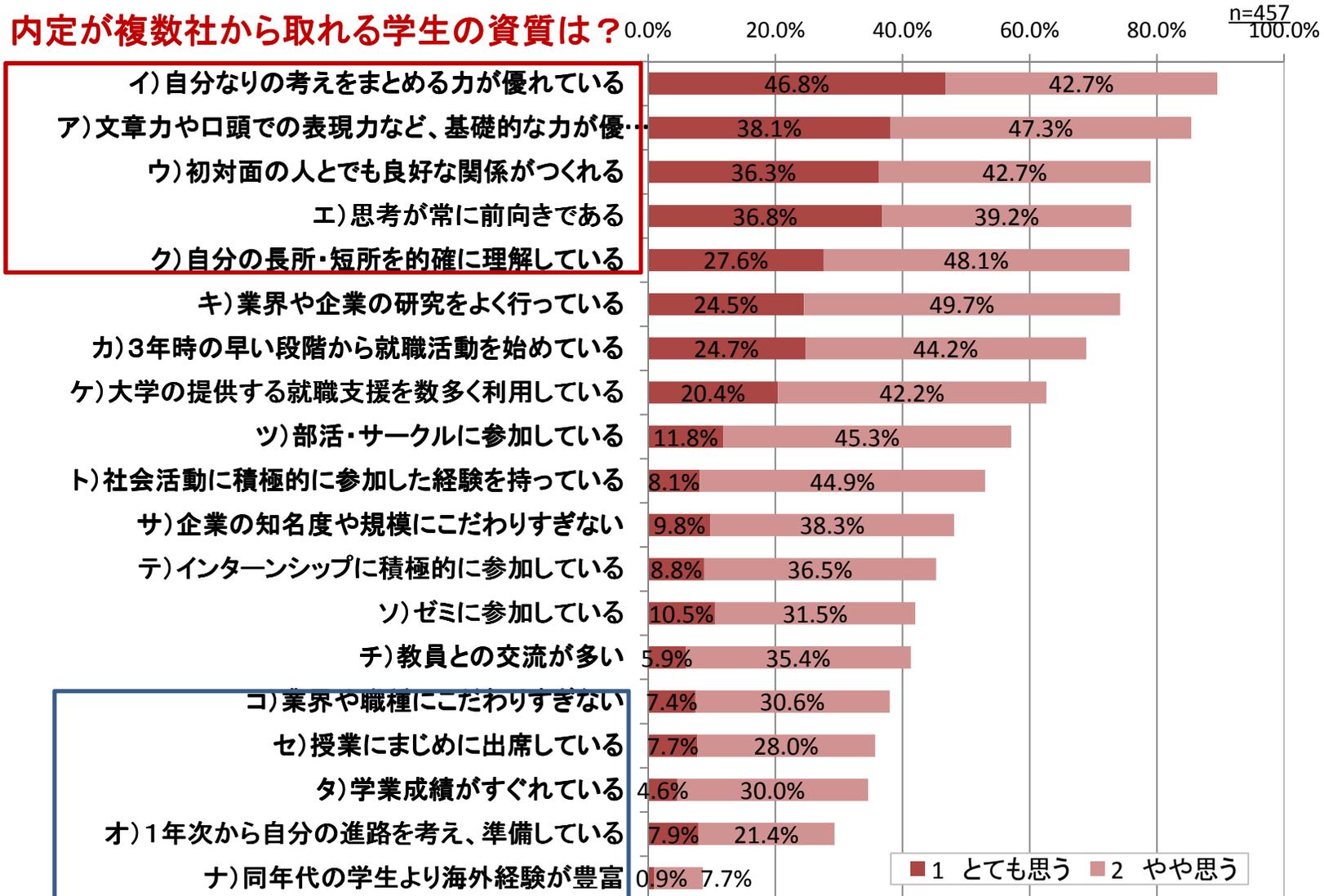
- ・文章力
- ・表現力
- ・2極化

注1) () 内の値は「とても思う」と「やや思う」の合計値。

注2) 選択肢は「とても思う」「やや思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「まったく思わない」の5段階。

注3) 対象は、キャリアセンター長または就職部門長457人。
「キャリア教育・就職支援の現状と課題に関する調査」(2010)

就業力の高い学生は、結局「汎用的能力」に優れている



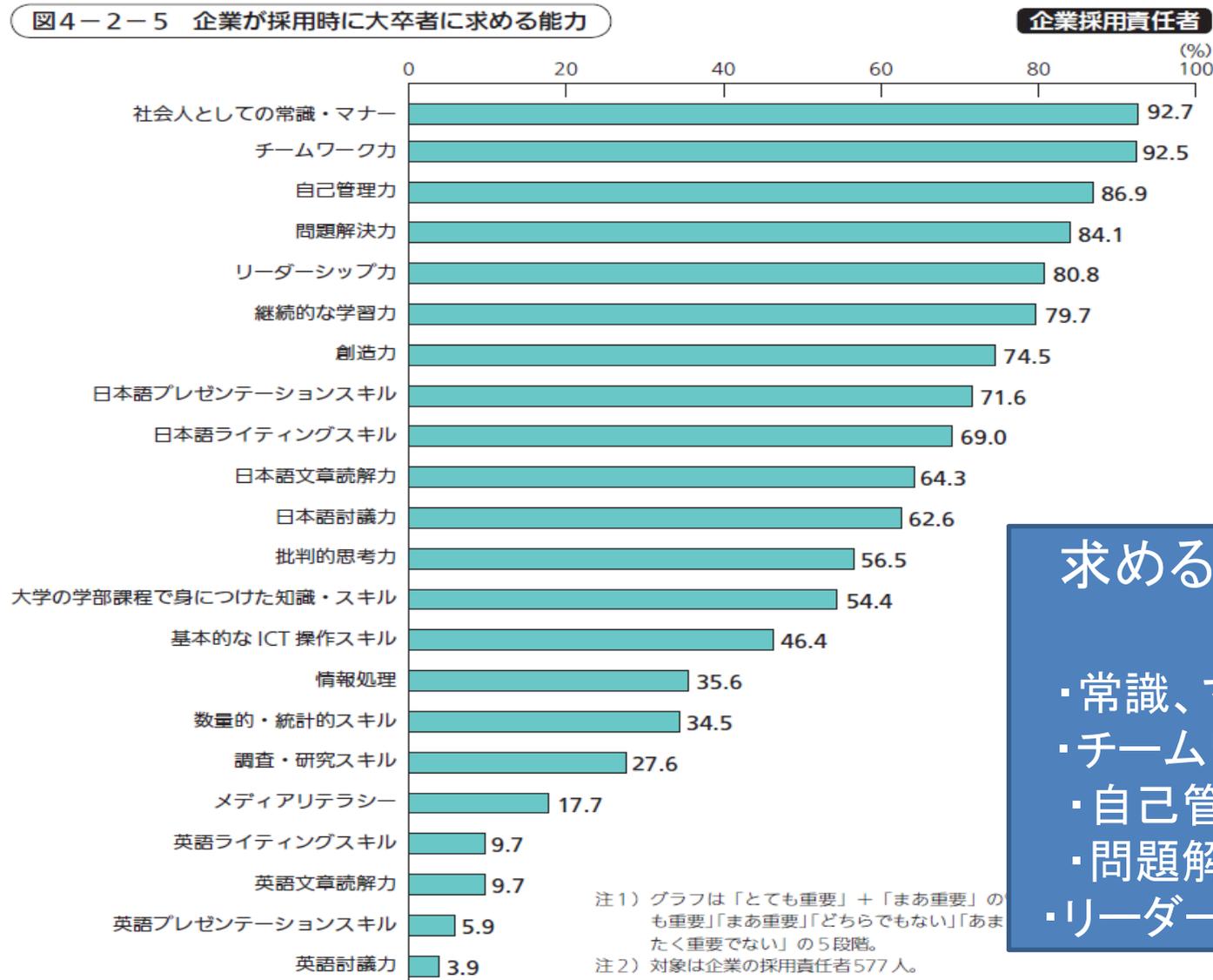
出典：ベネッセ教育研究開発センター「大学キャリアセンター実態調査」速報値

(C) Benesse Corporation 無断転載を禁じます

社会との接続

Q 貴社では、大学学部卒の新規採用にあたって、職種を問わず採用時の要件として次のような能力をどの程度重視していますか。

図4-2-5 企業が採用時に大卒者に求める能力



求める能力

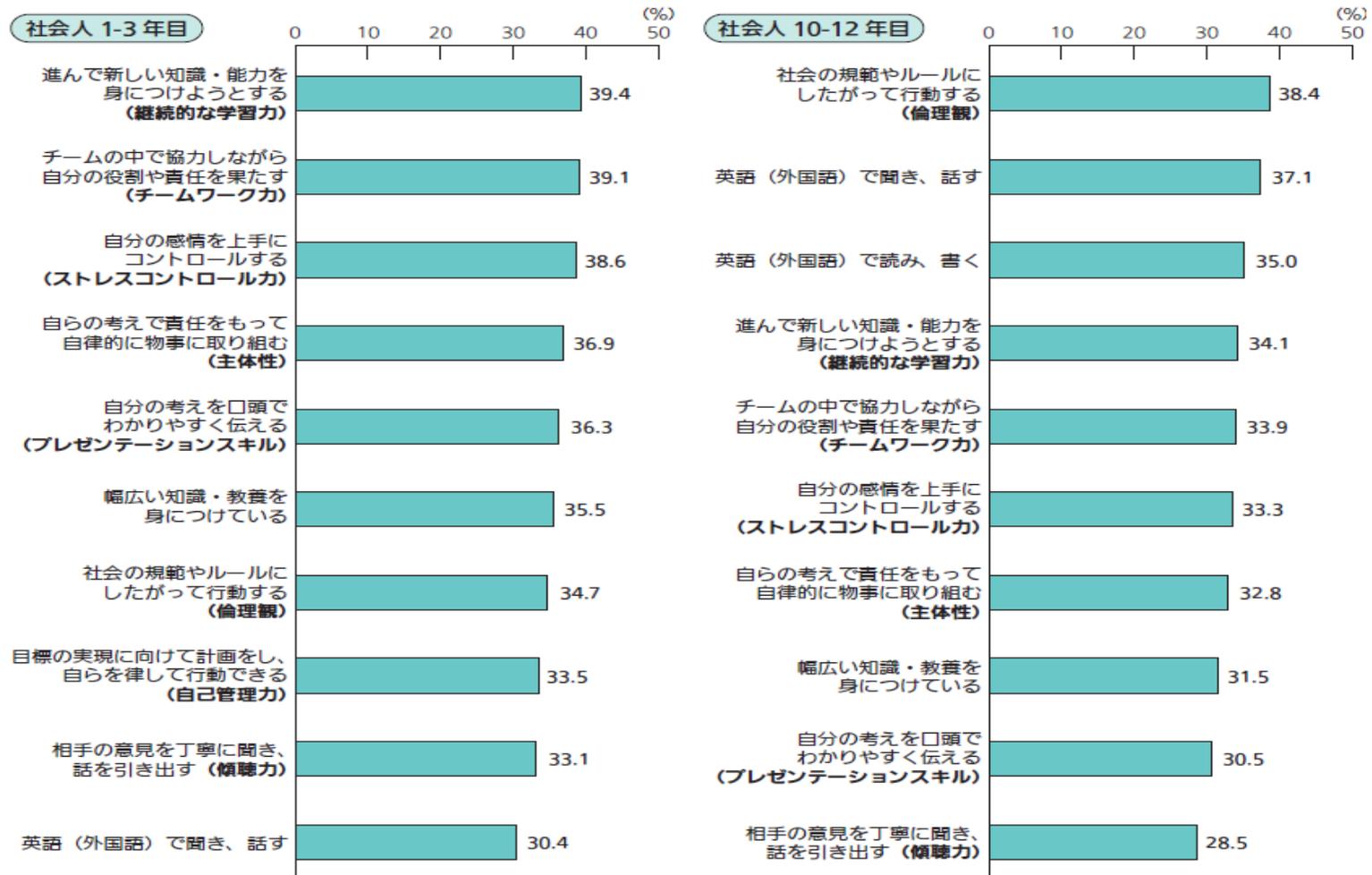
- ・常識、マナー
- ・チームワーク
- ・自己管理能力
- ・問題解決力
- ・リーダーシップ

社会との接続

Q 次の能力・スキルのうち社会人になる前に身につけておいた方が望ましいと思うものは何ですか。あてはまるもの全てを選択してください。

図4-4-4 社会人になる前に身につけておいた方が望ましい能力・スキル（上位10項目）

社会人

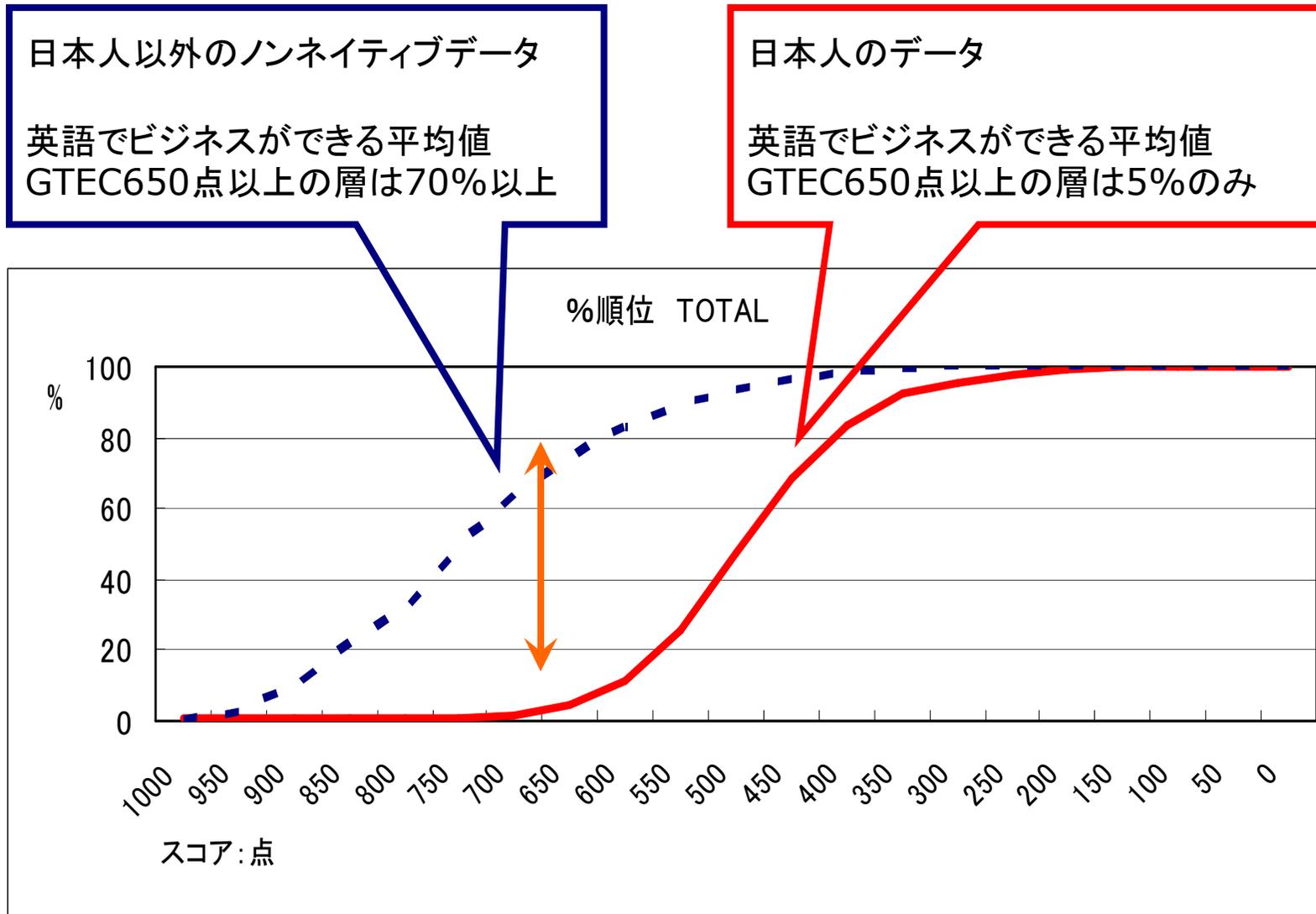


注1) 複数回答。

注2) 対象は、社会人1-3年目1,732人、社会人10-12年目1,854人。

「社会に必要な能力と高校・大学時代の経験に関する調査」(2010)

日本人ビジネススピールの英語能力



3. グローバル人材の育成と質保証

これまで提言された様々な資質・能力について(イメージ案)

変化の激しい社会にあって、個人の自立と活力ある社会の形成を実現するためには、どのような資質・能力が必要か。

子どもから大人まで

発達段階、学校段階の特質に応じた育成

「キー・コンピテンシー」(平成11年～14年OECD「能力の定義と選択」(DeSeCo)プロジェクト)

- ・OECDが主導し、多数の加盟国が参加したプロジェクトで国際的合意。(生徒の学習到達度調査(PISA)(3年ごと)や、国際成人力調査(PIAAC)(5年ごと)で、これらの能力の一部に関する各国の状況を測定)
- ・グローバル化と近代化により、多様化し、相互につながった世界において、人生の成功と正常に機能する社会のために必要な能力。

①～③の核となる「考える力」

- ①言語や知識、技術を相互作用的に活用する能力:「言語、シンボル、テキストを活用する能力」「知識や情報を活用する能力」「テクノロジーを活用する能力」
- ②多様な集団における人間関係形成能力:「他人と円滑に人間関係を構築する能力」「協調する能力」「利害の対立を御し、解決する能力」
- ③自律的に行動する能力:「大局的に行動する能力」「人生設計や個人の計画を作り実行する能力」「権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力」

「総合的な「知」」(平成20年中教審答申(新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について～知の循環型社会の構築を目指して～(答申))

- ・「知識基盤社会」の時代において、様々な変化に対応していくために必要な力。狭義の知識や技能のみならず、自ら課題を見つけ考える力、柔軟な思考力、身に付けた知識や技能を活用して複雑な課題を解決する力、他者との関係を築く力、豊かな人間性など。

幼児教育、義務教育、高校教育

「生きる力」

(平成8年中教審答申(21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(第一次答申)))(別紙参考1・2)

- ・国際化や情報化の進展など、変化が激しい時代において、いかに社会が変化しようとする必要能力。「知・徳・体のバランスの取れた力」と定義。

※学校教育法において、①基礎的な知識・技能、②これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度と具体化。

①確かな学力

基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようとする、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

②豊かな人間性

自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など

③健康・体力

たくましく生きるための健康や体力

大学

「課題探求能力」

(平成10年大学審議会答申(21世紀の大学像と今後の改革方策について-競争的環境の中で個性が輝く大学-(答申))

- ・主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探求し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力

「学士力」(平成20年中教審答申(学士課程教育の構築に向けて(答申)))(別紙参考3)

①知識・理解

専門分野の基礎知識の体系的理解、他文化・異文化に関する知識の理解、人類の文化・社会と自然に関する知識の理解

②総合的な学習経験と創造的志向

獲得した知識・技能・態度等を総合的に利用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

③汎用的技能

コミュニケーションスキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力

④態度、志向性

自己管理能力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、市民としての社会的責任、生涯学習力

大学院

「大学院に求められる人材養成機能」

(平成17年中教審答申(新時代の大学院教育-国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて-(答申))

①創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者等

②高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人

③知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材

社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行のための「基礎的・汎用的能力」

(平成23年中教審答申(今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)))(別紙参考4)

- ・「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」。

「イノベーション創出に向けて必要な資質」(平成19年閣議決定長期戦略指針「イノベーション25」)

- ・「困難に立ち向かいそれを現実のものにしようとするチャレンジ精神」「既存の枠、常識にとらわれない、多くの価値観から生まれる高い志」。

「グローバル人材に必要な資質」(平成23年グローバル人材育成推進会議中間まとめ)

- ・「語学力・コミュニケーション能力」「主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」及び「幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと(異質な者の集団をまとめる)リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー」など。

【検討の視点の例】

・これらの資質能力は、すべての人に求められるのか、特定の人に求められるのか。

また、学校教育のみで培うべきものか。もしくは、地域社会の生活との関わりにおいても培われるものか。

・どのような政策が必要か。

(参考)上記のほか、これまで提言されてきた主な資質

社会参画の観点

人間力(平成15年人間力戦略研究会(内閣府))(別紙参考5)

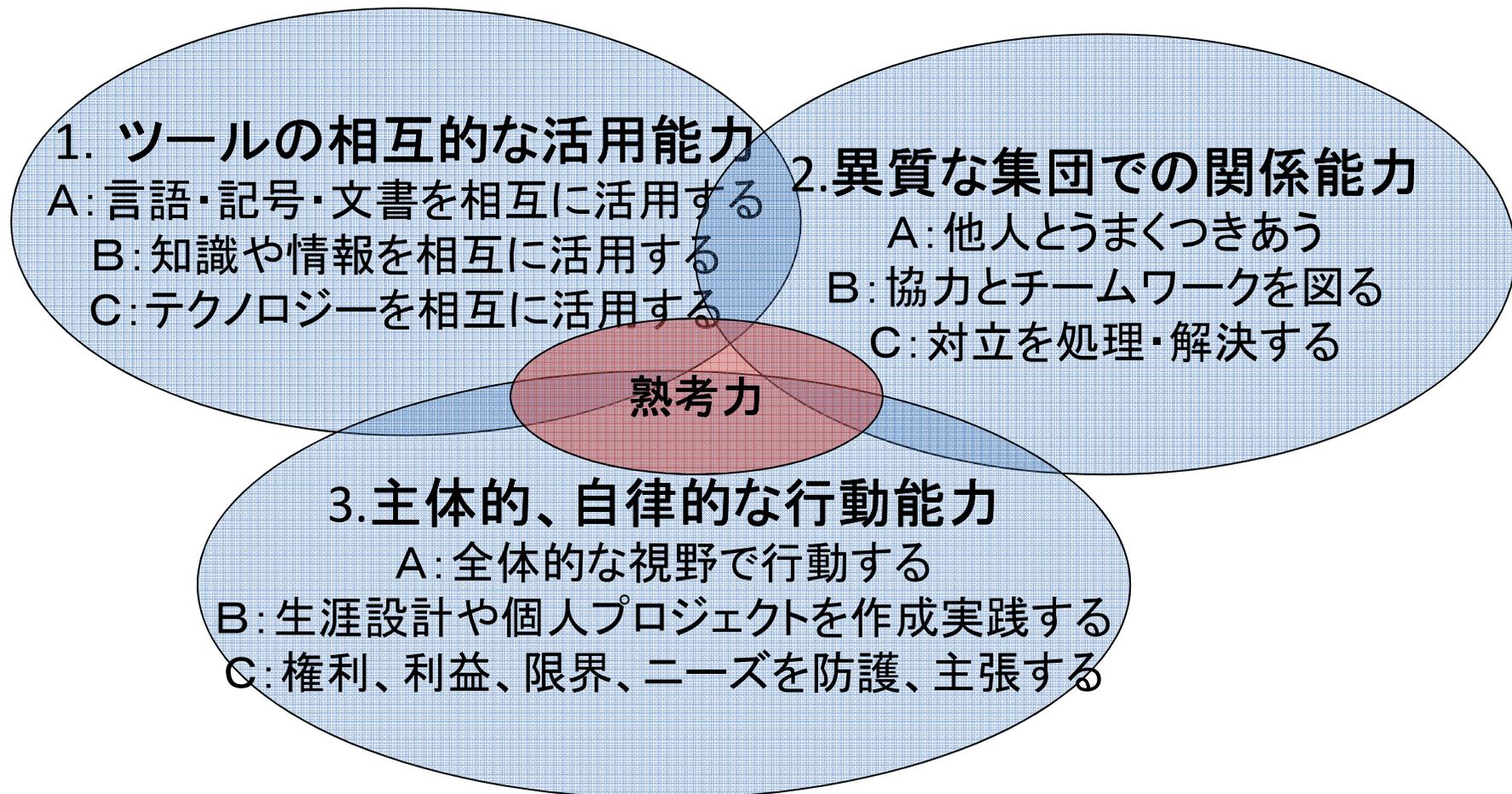
⇒ 「知的・能力的要素」「社会・対人関係力の要素」「自己制御的要素」の3つの要素で構成。

産業人材の観点

社会人基礎力(平成18年社会人基礎力に関する研究会(経済産業省))(別紙参考6)

⇒ ①前に踏み出す力(アクション)【主体性、働きかけ力、実行力】 ②考え抜く力(シンキング)【課題発見力、計画力、想像力】 ③チームで働く力(チームワーク)【発進力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力】

DESECOプロジェクトが設定したキーコンピテンシー

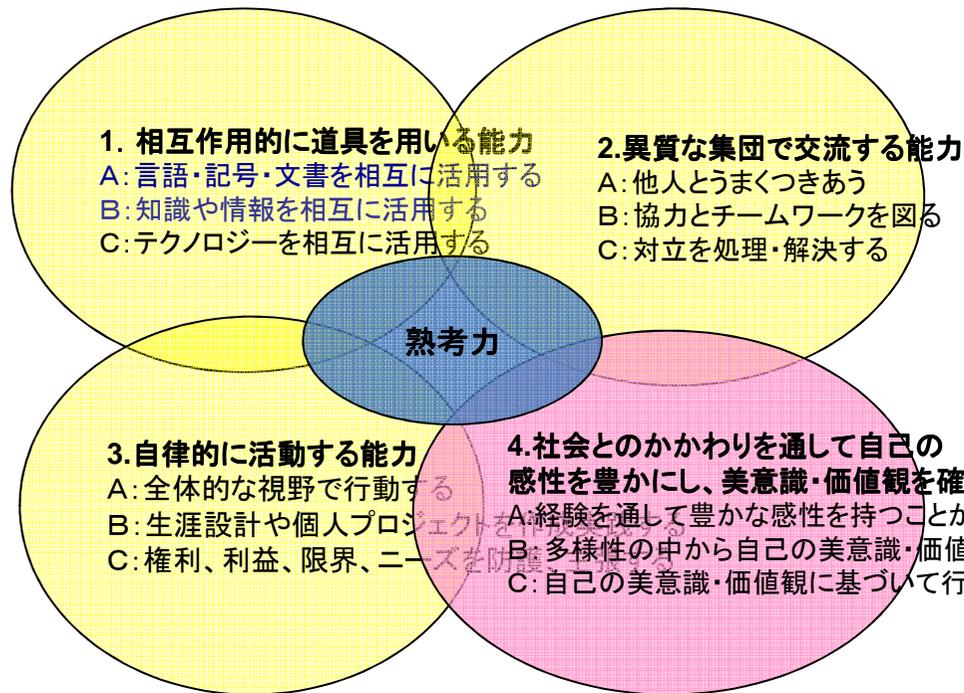


* ベン図であることに意味がある。

試案

ベネッセが考える必要な能力(2006)

国際化する社会で、よりよい生き方を追求し、
地域と世界の発展・向上に貢献するために必要な能力



ベネッセが考える必要な能力(2011)

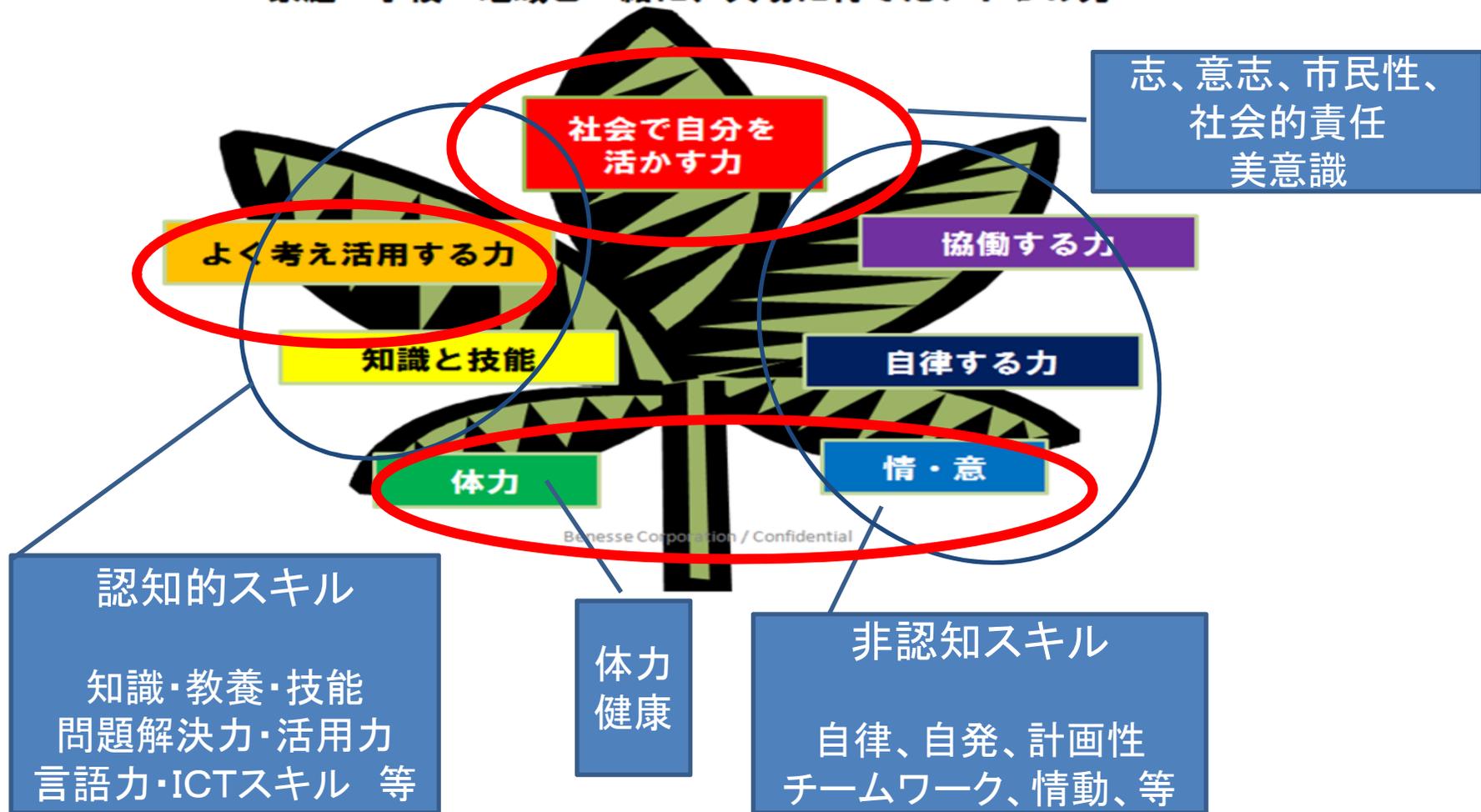
【よく生きるを応援するBenesseが育てたい人財像】

グローバル化する社会の中で、
自立して、自分を活かせる人財

家庭・学校・地域と一緒に、大切に育てたい7つの力



【よく生きるを応援するBenesseが育てたい人財像】
グローバル化する社会の中で、
自立して、自分を活かせる人財
家庭・学校・地域と一緒に、大切に育てたい7つの力





日本の社会に活気を取り戻すために、
海外の人材に日本の若者が負けないために、
産学が当事者意識を持って連携し、

【1】「社会で活躍できる人材をどのように育成すべきか」を
議論する

【2】 課題と解決の方向性を共有し、解決に向けて実践する

【3】 実践結果から得た知見を広く公開し、実践者を増やして

いく

産学協同



社長・学長
ではなく部長

学部長



評論ではなく
実践



得た知見は
公開



3年にわたる議論 2年間の実践

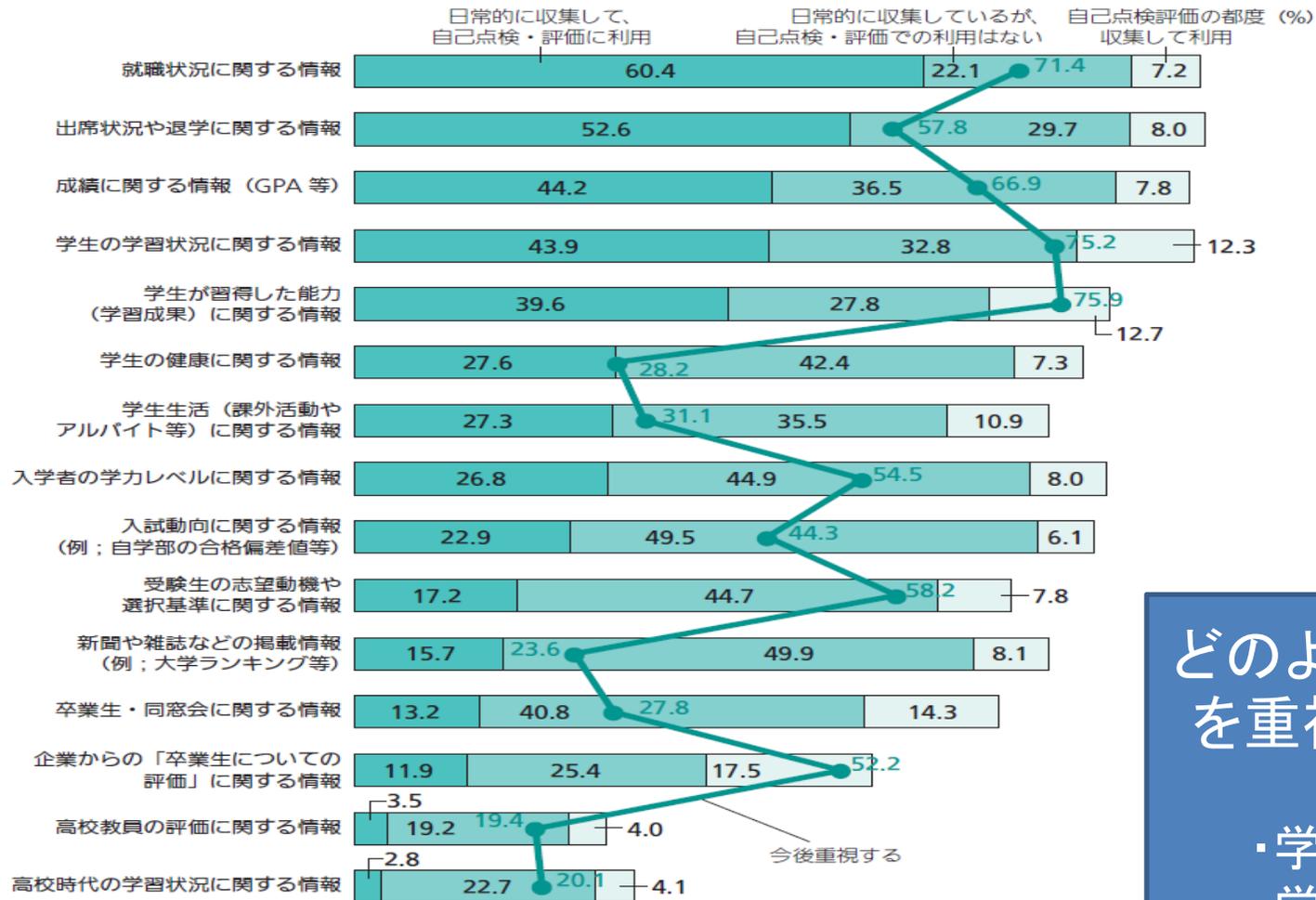
4. 育成と評価の課題

質保証・評価

- Q ①貴学部では、どのような情報を収集して自己点検・評価で用いていますか。
②貴学部では、自己点検・評価に際してどのような情報を今後重視しますか。

図5-1-5 自己点検・評価に用いている情報（現在利用と今後重視）

学部長



注1) Q①は「特に収集していない」は省略している。
注2) Q②は複数回答。
注3) 対象は学部長851人。
「質保証を中心とした大学教育改革の現状と課題に関する調査」(2009)

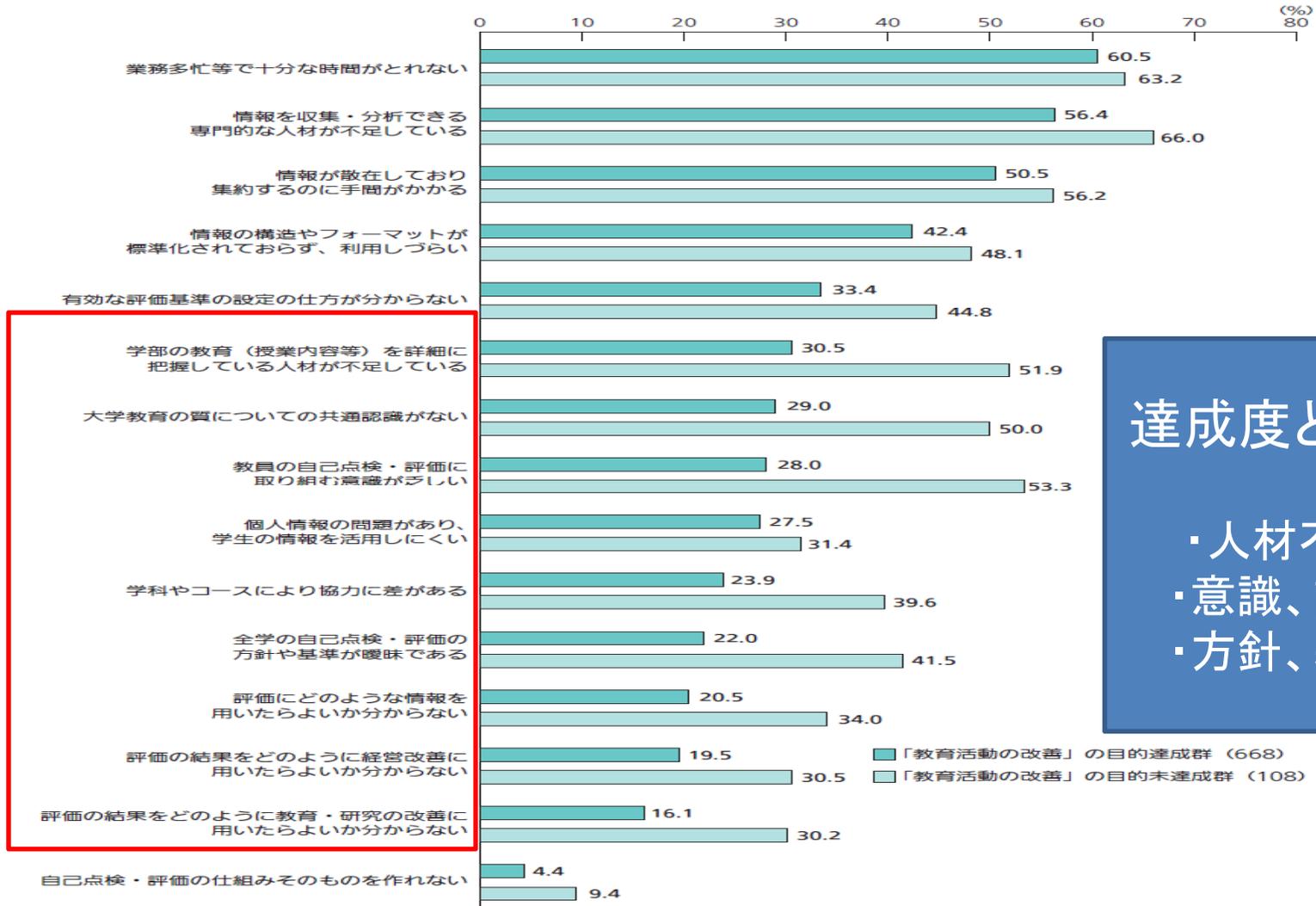
どのような情報を重視するか

- ・学習成果
- ・学習状況
- ・就職状況

質保証・評価

図5-1-9 自己点検・評価による教育活動の改善の達成度×自己点検・評価の課題

学部長



達成度と課題

- ・人材不足
- ・意識、認識
- ・方針、基準

注1) P91 図5-1-7の「自己点検・評価の目的の達成度」の「教育活動の改善」と図5-1-8「自己点検・評価の課題」のクロス集計。
 注2) グラフの値は「とてもあてはまる」と「ややあてはまる」の合計値。
 注3) 「教育活動の改善」の目的達成群:「非常に達成した」「やや達成した」の合計値。
 注4) 「教育活動の改善」の目的未達成群:「どちらともいえない」「あまり達成しなかった」「まったく達成しなかった」の合計値。
 注5) 対象は学部長851人。()内はサンプル数。
 「質保証を中心とした大学教育改革の現状と課題に関する調査」(2009)

求められる能力に応じた多様な評価方法

どのような能力か？ 目的は何か？

- ・標準化された大規模評価
- ・形成的評価
- ・ルーブリック
- ・ポートフォリオ
- ・質問紙
- ・面接法
等々

目的に合わせて使う
組み合わせて使う
評価を読み取る力

Benesse[®] 教育研究開発センター

Benesse Educational Research & Development Center

<http://benesse.jp/berd/>